

# 習近平の野心

デービッドソン前米インド太平洋軍司令官は、二〇二一年三月の上院での公聴会において、中国は六年以内に台湾に侵攻する可能性が高いと述べた。最前線で指揮を執る軍人トップの発言である。昨年八月のペロシ下院議長長の訪台に際し、中国は台湾周辺で大規模軍事演習を展開した。この時以来、中国の台湾侵攻が一段と差し迫ったものとして受け止められるようになった。

二〇二三年二月四日の各紙によれば、バーンズ米中央情報局(CIA)長官は、習近平平国家主席が二〇二七年までに台湾侵攻の準備を整えるよう軍部に指示したとの情報を得ている旨の発言をした。そのうえで習の関心と野心が本気であることに注目しなければならぬと語った。

習の立場からいえば、共産党総書記の任期二期十年とされてきた不文律を崩して第三期目に入り、党の要職のすべてを自派で固めた。このことは、習が次の共産党大会を経て第四期目を狙う可能性が生まれてきたことを意味する。それを確実なものとする

## 渡辺利夫 (公益財団法人オイスカ会長)

一九三九年、山梨県生まれ。七〇年、慶應義塾大学大学院経済学研究科博士課程修了。経済学博士。筑波大学・東京工業大学教授、拓殖大学学長、総長、学事顧問などを歴任(二〇一〇年十二月、退任)。二〇一七年六月より現職。

ためには、第三期目の執権の期間中に台湾統一という「偉業」を成し遂げることが不可欠となる。そう習は認識しているであろう。

習独裁体制が本格的に動き始めている。習に異を唱える人物はもはや見当たらない。習が誇大妄想に耽り、米・日・台の力量を見誤って暴走する危険な可能性がある。この可能性を排除する党内のメカニズムはもう消失している。

権力が一人の人間に集中すればするほど、この独裁者の失敗のツケは大きい。失敗が招く反発を抑え込むには、ますます強大な権力が必要となる。毛沢東以来の恐怖政治の再現か。習は登場以来、「中華民族の偉大なる復興」を唱えてきた。このスローガン実現のための核が台湾統一にあることが、ここにきていよいよ明らかである。暴走を抑制するメカニズムを失った政治はいかにも脆弱である。ここまできると習の運命は台湾統一の可否にかかってこよう。いかにも危うい道だが、これが専制政治の運命なのであろう。